

うしろの雲居雁

——「母」・「主婦」なるものをめぐって——

津島昭宏

(本学教授)

一、手紙を奪う雲居雁

自分のところに誰かの手が伸びてくる。近しい者の手であればその手を握ったり、受け止めたりなどして親愛の情を示すこともあるだろう。見知らぬ者や敵対する者であれば、その伸びてくる手や拳から咄嗟に身をかわずこともあるにちがいない。それでも、死角から伸びる手にはどうにも対処のしようがない。デューク東郷でなくとも、自分の背後は最も警戒すべきところなのだ。

宵過ぐるほどにぞこの御返り持て参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、御殿油近う取り寄せて見たまふ。女君、もの隔てたるやうなれど、いととく見つけたまうて、這ひ寄りて、御背後より取りたまうつ。「あさましう。こはいかにしたまふぞ。あな、けしからず。六条の東の上の御文なり。今朝風邪おこりてなやましげにしたまへる

を、院の御前にはべりて出でつるほど、またも参でずなりぬれば、いとほしさに、今の間いかにと聞こえたりつるなり。見たまへよ、懸想びたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。年月にそへていたう侮りたまふこそうれたけれ。思はむところをむげに恥ぢたまはぬよ」とうちうめきて、惜しみ顔にもひこじろひたまはねば、さすがにふとも見で、持たまへり。

(「夕霧」四一四二七)^(注)

未亡人である落葉の宮のもとへ、彼女に恋情を寄せる夕霧から手紙が届く。昨晚、夕霧は落葉の宮の傍で過ごしたものの拒まれたため、そのことをなじる文面であった。落葉の宮の母一条御息所は、二人が夜を共にしたことを知って心痛めるが、誠実さを感じ取れぬ手紙を寄こした夕霧へ、娘に対する思いを確かめるべく夕霧に返事を書く。掲げた場面は、その返事を夕霧が手にとったところである。病重き御息所が書いた手紙の筆跡は鳥の足跡のようなものだったた

め、容易に判読することができない。灯りを近くに寄せて夕霧が手紙を見ていたさまは、熱心に恋文を読む男のすがたに見えたことだろう。夫である夕霧と落葉の宮との関係を憎々しく思う雲居雁にしてみれば、我慢ならぬことだったのだ。

背後から伸びる手にはどうにも対処のしようがない。手紙を読みふける夕霧と雲居雁との間には何かしら物の隔てがあったようなのだが、彼女は「這ひ寄りて、御背後より」手紙を奪い取るのであった。「国宝源氏物語絵巻」の「夕霧」にも描かれた有名な場面となるが、この雲居雁の振る舞いについて新編全集の頭注は、

はしたない行為。律儀な夕霧との単調な夫婦生活、子沢山の日常生活になれて、優雅な身だしなみを忘れている。加えて昨夜の外泊に腹を立てているので、しぜんにこうした行動にでる。

と解説している。おおよそ、本場面における雲居雁の振る舞いについては、このような理解がなされていることだろう。たしかに、他人が読む手紙というのは気になるものであり、それを覗き見たいとする欲望は誰も持っている^(注2)。ましてや自分の夫に新しい女の影がちらつく時に、夫が手紙を読みふけているならばその発信元を確かめたいと思うのはしぜんなことだ。それでも、雲居雁の場合は背後から「這ひ寄り」、しかも手紙を奪っている点が、とりわけ「はしたない行為」と評されるわけである。

さて、このような行動に出る雲居雁は、これまでどのように捉え

られてきたのか、先行研究を振り返っておきたい。解説的なものは、「恋にあこがれる純真無垢な少女から、日常性に埋没した平凡な主婦の典型へと変わる」と^(注3)と、雲居雁の人生史を簡潔にまとめたものがあり、これは先の頭注にも通じるが、雲居雁への理解は一般にこのようなものが多い。それにしても、「平凡な主婦」というのは随分な言葉であろうである。今回の手紙を奪うところや痴話喧嘩する点などについても、家庭喜劇的な要素が強いのだという^(注4)。姫君らしからぬこうした行動については、「健康的な姿」であるとして、それを貴族社会への警鐘として積極的に評価するものまである^(注5)。一方で、雲居雁の嫉妬は、女三宮降嫁時における紫上の描写に通じるとする意見もあり^(注6)、嫉妬する妻としての姿は、筒井筒の物語を踏まえた少女時代から、妻あるいは母としての姿となるよう造型化されているということとなる^(注7)のだろう。

いずれにしても、可憐な少女時代から始まり、夕霧の妻となつて、また子だくさんの母となつた雲居雁については、「母」や「主婦」、また「家庭」といった語で説明されることがままたり、そうであるがゆえに、問題とする手紙を奪う場面についても、深刻なものとしてでなく、いささか軽い、喜劇的なものと読まれてきたように思われる。

しかしながら、背後から「這ひ寄り」手紙を奪うという異常な振る舞いは、そのように軽いものとして果たして描かれているのだら

うか。「国宝源氏物語絵巻」の「夕霧」では、その雲居雁が「立ち姿」という原文にはない描かれ方をしており、激しい怒りや嫉妬のさまといったものがそこから読み取れよう。^(注8)ただし、原文にはない「立つ」ことを描く手法については、「立つ」の原義、すなわち霊的なものが顕れれることと無縁でないことには注意しておきたい。^(注9)

一方で、そもそも原文には「這ひ寄」る雲居雁が語られているのであったが、それは絵巻に見える「立つ」雲居雁とどのように通底するのだろうか。「這ひ寄る」行為については、相手に対する敬愛の情や好意を示すものという意見もあるが、^(注10)一方で、それが女の情念に基づく反理性的な自制心を失った振る舞いだとする見解もある。^(注11)本論では、ひとまず後者の見解に従いたいと思うが、雲居雁が手紙を奪うという常軌を逸した行動について、単に、家庭喜劇的な夫婦喧嘩といった次元でなく、人の背後、「うしろ」から「這ひ寄」るとするところに、ある種のおぞましさを読み取ってみたいと思う。

二、うしろの世界

自分の背中、背後は自分自身で見ることができない死角となるゆえに、とかく不安感を抱かせるものである。不安感とは自分の存在を脅かすものであるのだから、他者からの冷たい眼差しや、非難、嫉妬、あるいは呪いにも近い感情がその源となることがある。した

がって、死角である背中という部位は、そうした他者による負の感情を呼び寄せるものでもあったわけである。

それを確かめるために、ひとまず「しりうごと（しりうごつ）」という語から考えてみよう。この語は「後言」の字をあてて陰口を言うことを指すが、これは非難、嫉妬の感情に基づいて人を攻撃するための言葉が、「しり」すなわち背後から発せられるものだということがよく分かる。呪力ある言葉を、その対象の最も弱い部位へとぶつけるのである。『源氏物語』「若菜下」巻における次のような例から確かめてみよう。

ほのぼのと明けゆくに、霜はいよいよ深くて、本末もたどたどしきまで、酔ひ過ぎにたる神楽おもてどもの、おのが顔をば知らで、おもしろきことに心はしみて、庭燎も影しめりたるに、なほ「万歳、万歳」と榊葉をとり返しつつ、祝ひきこゆる御世の末、思ひやるぞいとどしきや。……中略……尼君の御前にも、浅香の折敷に、青鈍の表をりて、精進物をまゐるとて、「目ざましき女の宿世かな」と、おのがじしはしりうごちけり。

〔若菜下〕四一―一七四

光源氏によって住吉参詣がなされる場面である。光源氏と明石の君との間に生まれた娘、明石の女御腹の第一皇子が東宮となったことに伴う、女御の祖父にあたる明石の入道の願果たしの参詣であった。「万歳、万歳」という祝福の詞章が、光源氏そして第一皇子を

もたらした明石一族に降りかかり、明石の女御の祖母尼君のもとにも「精進物」が提供されていることが分かる。しかし、その晴れがましい場に加わることできた明石の尼君に対しては、「目ざましき女の宿世かな」と陰口の声があったことも物語は伝えている。明石の女御腹の第一皇子が東宮となり、明石一族の繁栄が実現するその文脈において、「目ざましき女の宿世かな」との声は、羨望の眼差し以上にそれに嫉妬する感情が渦巻いていたことを語つていよう。^(注12) 「万歳、万歳」の声が出されるなか「しりうご」つ声があったことは、祝福することと呪詛することが同居することさえある、感情というものの一側面を伝えているわけである。

背後に向けられる人間の感情は言葉だけではない。笑いという攻撃をしかけることもあれば、指を差すという手段を講じることもある。

十月十余日の月のいと明かきに、ありきて見むとて、女房十五六人ばかり、みな濃き衣を上に着て、引きかへしつつありしに、中納言の君の、紅の張りたるを着て、頸より髪をかき越したまへりしが、あたらし。そとばに、いとよくも似たりしかな。「ひひなのすけ」とぞ若き人々つきたりし。後しりに立ちて笑ふも知らずかし。
〔「枕草子」〕十月十余日の月いと明かきに

大宰相の君などいふ人、おばおとどなどいひつけたまひ、指をさし言ひつれど、

〔「采花物語」卷十一「ひかげのかづら」一一五〇四〕
一つ目の『枕草子』は分かりづらい章段だが、月の明るい時分に女房らが見物に出かけた際の話で、中納言の君の身なりが笑われているらしい。「ひひなのすけ」、これは中納言の君を揶揄する綽名の類と思われるが、その綽名とともに「後に立ちて笑ふ」若い女房のすがたが見えている。「知らずかし」の語が添えられていることに端的なように、やはりこうした攻撃的な笑いは死角よりなされるものであるようだ。類似するものとして『采花物語』には、「大宰相の君」という女房を「おばおとど」と綽名で呼ぶ例があるが、ここは「指をさし」とあり、直接「うしろ」や「しり」という語を伴わないものの、やはり当人の見えないところでなされたものであろう。つまり、こうした非難や嫉妬という負の感情、人間の暗部は、うしろの世界と結び付くものであることが確かめられるのではないだろうか。

「結縁のために物参らせてみん」とて、呼ばせ給ひければ、いみじげなる聖歩み参る。その尻に餓鬼、畜生、虎、狼、犬、鳥、数万の鳥獸など、千万と歩み続きて来けるを、異人の目に大方便見ず、ただ聖一人とのみ見けるに、

〔「宇治拾遺物語」卷二一一「清徳聖、奇特の事」〕

この殿、何御時とは覚えはべらず、思ふに、延喜・朱雀院の御ほどにこそはべりけめ、宣旨奉らせたまひて、おこなひに陣座さまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせたまふに、ものけはひして、御太刀の石突をとらへたりければ、いとあやしくてさぐらせたまふに、毛はむくむくと生ひたる手の、爪ながく刀の刃のやうなるに、鬼なりけりと、いとおそろしくおぼえけれど、

〔大鏡〕「忠平」九五

『宇治拾遺物語』の例は、あまりに大食いの聖がいたものだから、結縁のために食べ物を与えたところ、聖の背後に餓鬼や畜生など無数の鳥獸などが続いており、実はそれらに食べ物を与えていたという話である。藤原師輔以外は誰にも背後に続くモノたちが見えなかったために大食いの聖と誤解されたのであり、たしかに聖自身はそれらモノたちにまで食べ物を分け与える存在であったが、そんな聖の背後にまでも餓鬼や畜生の類が取り憑いている。傍線を付したように「その尻に」と、まさに人間の背後には欲望や嫉妬などの感情が向かいやすく、それが異形なるモノ、妖気漂うモノとして具現化されたのがこの説話なのではないだろうか。

続く『大鏡』貞信公忠平の箇所では、紫宸殿の御帳台のうしろのあたりに「ものけはひ」が感じられると出てくる。「御太刀の石突」を捉える手が毛むくじやらで、刃先のような長い爪をもっていたことから、「鬼なりけり」と忠平は確信する。恐ろしさを感じるもの

の撃退する忠平の剛胆ぶりを語るところであるが、ここもやはり御帳台の「うしろ」とあり、人間の背後でなくとも、「うしろ」の世界は妖気漂う空間として認識されていたようだ。

一方で、餓鬼や鬼といったものでなく、守護霊のようなものが取り憑くところもまた「うしろ」であったらしく、それが窺える例を以下に引いてみよう。

御物の怪こはくて、いかがと思し召ししに、大嘗会の御禊にこそ、いとうるはしくて、わたらせたまひにしか。「それは、人の目にあらはれて、九条殿なむ御うしろを抱きたてまつりて、御輿のうちにさぶらはせたまひける」とぞ、人申しし。げにうつつにても、いとただ人とは見えさせたまはざりしかば、ましておはしまさぬ後には、さやうに御まぼりにても添ひ申させたまひつらむ。

〔大鏡〕「師輔」一七一

見れば、大式の三位、うしろのかた抱きまゐらせて、大臣殿の三位、ありつるままに添ひ臥しまゐらせられたり。

〔讃岐典侍日記〕上卷、四一四

前者の例は、一族の繁栄に強烈な力を発揮した九条殿師輔の話である。師輔の孫である冷泉院には執念深く物の怪が取り憑いていたが、大嘗会の御禊の行幸でもどうにか事なきを得た。それというのも、御輿のなかで冷泉院の「御うしろ」を九条殿師輔の霊が抱いていたからである。存命中に「ただ人」とは見えなかった師輔だから

こそ、死後はなおのこと守護する霊として活躍する、その靈魂が「御うしろ」に確認できるのである。『讚岐典侍日記』の例は、堀河天皇が危篤に陥った際に大弔の三位が「うしろのかた」を抱いているものである。もちろん、ここは守護霊の類ではなく乳母が病身の天皇を抱えているわけだが、ここも、ただ身体を支えるような意味合いではなく、霊的なものが取り憑きやすい「うしろ」を守護したものと考えられるのではないだろうか。大臣殿の三位が添い臥していることと合わせ、霊的なものから護る呪的なふるまいと見ておきたい。^(注13)

その日のよさり、火をほのかにかきあげて泣き臥せり。あとの方ぞそそめきけり。火を消ちて見れば、そひ臥す心地しけり。死にし妹の声にて、よろづの悲しきことを言ひて、泣く声もいふことも、ただそれなれば、もろともに語らひて、泣く／＼さぐれば、手にもさはらず、手にだにあたらず、ふところにかき入(れ)て、わが身のならんやうも臥さまほしきことかぎりなし。

(武蔵野書院『篁物語新講』五九)

ただし、霊的なものが出現するのは、人間の背後、背中という部位に限らないのかもしれない。掲げた『篁物語』の用例では、火を点していることが見えるが、これは霊的なものを呼び寄せたり、逆に霊的なものを退散させる魔除けの意味が認められるもので、すなわちこの場面が霊的な磁場にあることを雄弁に物語っており、霊と

なった篁の妹が「あの方」に現れ出てきている。「あの方」とは一般に足元と理解されており、背後ではないこうした事例も見出せるのである。したがって、「あの方」も「うしろ」と同じく、当人の手の及ばないところとして認識されていたのだろう。三柴友太は、近代の事例ではあるものの多く伝承のなかに、人間の足元・背後に妖怪が出現することを指摘し、人間の死角となる足元や背中が、「魂の出入り口や異界の住人、つまり妖怪や浮かばれない靈魂との接点となる」と述べているが、思っている以上に古代と現代は繋がっているのちがいない。^(注15)

ともあれ、こうした視点については、やはり民俗学の知見を採用することが有効だろう。常光徹は、「ある状況のもとで、後ろを意識したり、わざわざ後ろ向き格好をするのは、そのとき、自らの背後に異界や妖怪、幽霊、死霊、穢れなどといった非日常が想像されている場合が多い」と論じている。^(注16) また、安井眞奈美は、「とりわけ乳幼児や子どもの背中は狙われやすく、また子どもの魂は背中から抜けると考えられてきた」とし、「背中は悪霊に狙われやすい箇所とみなされていた」と述べている。^(注17) 分かりやすい民俗事例としては、乳幼児の着物に縫い付けられた背守りというものを取り上げることができる。^(注18) 着物の襟のしたに印し飾りを縫い付けてお守りとするもので、実にさまざまなものがあり装飾品ともなるものだ。つまり、この背守りも「背」が霊的なものが出現する場であるからこそ、

そこに呪的な力を發揮するものを縫い付けているわけであり、こうした観念を意識することが今回問題とする雲居雁の振る舞いの意味を考へるうえでも大切になつてくるのではないだろうか。

三、うしろから近づく

古典文学の事例をあらためて拾つてみよう。うしろの世界から近づいてくるもの、その反対にうしろの世界へと近づいていくものの例である。

只、「仏助ケ給へ」ト念ジテ居タル程ニ、後口二人ノ足音シケレバ、見返テ見ニ、物荷タル男ノ笠着タル、歩ミ来レバ、人來ルニコソ有ケレト喜ク思テ、道ノ行方問ムト思フ程ニ、此男、僧ヲ極ク怪氣ニ思タリ。僧、此ノ男ニ歩ビ向テ、「何コヨリ何デ御スル人ゾ。此道ハ何コニ出タルゾ」ト問ヘ共、答フル事モ無テ、此滝ノ方ニ歩ビ向テ、滝ノ中ニ踊リ入テ失ヌレバ、僧、「此ハ人ニハ非デ鬼ニコソ有ケレ」ト思テ、弥ヨ怖シク成ヌ。

（新日本古典文学大系『今昔物語集』卷二十六第八「飛騨国猿神、止生贅語」）

夢に見るやう、御帳の帷を引き開けて、「まことに、かく年来参り歩きつるに、いとをし。これ得よ」とて、物を賜へば、左右の手を広げて給はれば、白き米をひと物入れさせ給へりと見

て、驚きて、手を見れば、まことに左右の手に、ひと物入りたり。「あないみじ」と思ひて、「夢見ては、疾くこそ出づなれ」とて、やがて出づるに、後にそよと鳴りて、人の気色、足音す。「あやし」と思ひて、見返りたれば、毘沙門の、ふくを持ちて送り給なりけり。御顔をば外様に向けて、予して、疾く行けとおほしくて、突かせ給と見て、急ぎ出でにけり。

（新日本古典文学大系『古本説話集』六八「小松僧都事」）

まづ、僧都渡りたまふ。いといたく荒れて、恐ろしげなる所かなと見たまひて、「大徳たち、経読め」などのたまふ。この初瀬に添ひたりし阿闍梨と、同じやうなる、何ごとのあるにか、つきづきしきほどの下藤法師に灯点させて、人も寄らぬ背後の方に行きたり。森かと思ゆる木の下を、疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、灯を明くなして見れば、ものゝたる姿なり。

（「手習」六一二八一）

初めに掲げた『今昔物語集』の用例は、山に迷い込んだ僧侶が仏に助けを求めた際に、背後から人の足音を聞くが、それは実のところ異界へと導く鬼であったというものである。異界の住人であることは、「物担タル男ノ笠着タル」すがたであることや、「滝ノ中ニ踊リ入テ失ヌレバ」とする描写から十分に窺うことができよう。また、

『古本説話集』の用例は、鞍馬寺に三日ほど参詣しようとした小松の僧都が、どうせなら七日間、二十一日間と、しだいに日数が増えていき、ついには霊夢を見るまでということと三千日に及んだ話である。三千日目ようやく霊夢を見たことで鞍馬寺を後にしようとする、自分のうしろから足音が聞こえるが、振り向くと毘沙門天がそこにいたのであった。いずれも、背後から近寄るものを人の足音であると誤って認識し、実際は鬼や仏神であったというものである。うしろから足音が聞こえるというのは、霊的な存在を語るある種の手法なのかもしれない。^(注10)

一方で、反対に自分の方からうしろの世界に近づく用例が、『源氏物語』の「手習」巻に見られる。横川の僧都の母が初瀬詣をしたところ体調が急変したため、僧都が母を安静にさせるべく宇治院へと渡るところである。宇治院は手入れが行き届いておらずひどく荒れていて、いかにも妖気漂うところであった。僧都が「大徳たち、経読め」と弟子に指示しているのも、邪気を払うためであったろう。その宇治院の「人も寄らぬ背後の方」で阿闍梨らが「白き物」を発見している。ここでも下臈法師に火を点させているのが注意されるが、物の怪のように思われた「白き物」は失踪した浮舟だったという展開である。

以上の例からも分かる通り、うしろの世界とは霊的なものと結び付きやすいところであるととも、その霊的なものはしばしば人間

の姿と互換性のあるものだったということが分かる。互換性という言葉の方が適切でないならば、人間の側面、特に人を恨んだり呪ったりするよこしまな感情や、悩み苦しみといった負の感情が霊的なものと結びつきやすいとは言えるだろう。「心の鬼」という語が存在することからも、「鬼」がそうした感情を象徴化したものである事例は認められるものであるし、また浮舟という女は二人の男からの愛に翻弄されて川に身を投げるほどの苦しみを抱えていたからこそ、霊的なモノに見誤られたのであったろう。

この点を考えるにあたって、どうしても見逃せない事例が、『源氏物語』作者紫式部と関わる以下に掲げるものである。

絵に、物の怪つきたる女のみにくきかた描きたる後に、鬼になりたるもとの妻を、小法師の縛りたるかた描きて、男は経読みて、物の怪責めたるところを見て

亡き人に託言はかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ
返し

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ

(和歌文学大系『紫式部集』四四・四五)

しばしば論じられる『紫式部集』に見える歌となる。物語絵なのであろうか、物の怪が取り憑いた妻が醜く描かれたその背後に「鬼になりたるもとの妻」がいるとする絵をうけて、「亡き人に託言はかけて……」の歌が示される。妻に取り憑いた物の怪を亡き先妻の

しわざとする男に対し、それは男自身の「心の鬼」が見せた幻影なのだろうとする歌意である。背後の「鬼になりたるもの妻」に、「おのが心の鬼」を見ているところからは、人間の情念と鬼との結びつきを示し、かつそれがうしろの世界に顕れ現れているものと十分に考えられるはずである。

そうした人間の情念が背後から近づく例を、今度は『源氏物語』から拾ってみることにしよう。

灯はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上、ここかしこのくまぐましくおぼえたまふに、物の足音ひしひしと踏みならしつづつ背後より寄り来る心地す。惟光とく参らななと思す。あり処定めぬ者にて、ここかしこ尋ねけるほどに、夜の明くるほどの久しさは、千夜を過ぐさむ心地したまふ。

〔夕顔〕一一一六九

光源氏が夕顔を連れ出した某廃院で物の怪が出現する、よく知られた「夕顔」巻の用例である。こんな緊急事態であるのに、源氏が最も信頼を寄せる部下である惟光のすがたが見えない。またしてもここでは火が点されている例となっているが、その瞬く燈火のさまは靈物の呼吸と連動してもいようか。屏風の上のあたりはいかにも暗く、「物の足音ひしひしと踏みならしつづつ背後より寄り来る心地」がするのだとされている。「物の」の語に明らかかなように、これは背後から近づく物の怪を光源氏が感じ取っており、その物の怪とは、

枕元に出現して恨み言を口にした、「いとをかしげなる女」〔夕顔〕一一一六四のそれと繋がる^{と見てよいだろう}。

正身はいみじう思ひしづめてらうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取をとり寄せて、殿の背後に寄りて、さと沃かけたまふほど、人のや見あふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしままふ。さるこまかなる灰の目鼻にも入りて、おぼはれてものもおぼえず。払ひ棄てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたまひつ。うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへり見すべくもあらずあさましけれど、例の御物の怪の、人に疎ませむとする事と、御前なる人々もいとほしう見たてまつる。

〔真木柱〕三一一三五

あるいはまた、右に掲げたような例ははどうだろうか。鬚黒が玉鬘のところへ出向く際に、北の方が火取りの灰を浴びせかける、これまた有名な場面である。この常軌を逸した行動は、にわかに起き上がって鬚黒の「うしろ」から近づいてなされていたこと、その点をやはり重く受け止めたい。一般には鬚黒の北の方の奇行と理解される^{ところだろうが}、「奇行」と烙印を押すことで、その行動に至る北の方の苦悩は見えにくいものとなっている。女の苦しみ抜いたあげくもたらされた常軌を逸した行動を、「例の御物の怪の、人に疎ませむとする事」、すなわち物の怪が原因である^{とすることや}、

あるいは「奇行」と位置づけることで、女が抱える苦しみと切り離し、あたかもそれとは何ら関係しないもののように認識してしまう危うさに慎重でありたい。

背後から近寄る女、それは雲居雁も同じであった。すでに指摘する論もあるが、この鬚黒北の方が背後から火取りの灰を浴びせかける異常な行為は、雲居雁が手紙を奪い取る場所に通じるものがある^(注20)。そうだとすれば、雲居雁の常軌を逸した振る舞いについても、夕顔を取り殺す物の怪のすがたや鬚黒北の方が抱える苦しみと繋がる女の情念を認めることができるのではないだろうか。これまで論じられてきたように喜劇的な痴話喧嘩というふう読み取ること、見えにくくなるものがあるのではないか、ということである。

四、怒れる雲居雁

健康的なものの考え方や、健全な精神というものが仮にあるとしても、その感情のみが人間を支配するものではないだろう。雲居雁も怒れる女として、負の感情を抱いていたであろうことは、想像するに難くない。

わが北の方は、故大宮の教へきこえたまひしかど、心にもしめたまはざりしほどに別れたてまつりたまひにしかば、ゆるるかにも弾きとりたまはで、男君の御前にては、恥ぢてさらに弾き

たまはず、何ごともただおいらかにうちおほどきたるさまして、子どもあつかひを暇なく次々したまへば、をかしきところもなくおぼゆ。さすがに、腹あしくてもねたみうちしたる、愛敬づきてうつくしき人ざまにぞものしたまふめる。

〔若菜下〕四—二〇三

「……本妻強くものしたまふ。さる時にあへる族類にて、いとやむごとなし。若君たちは七八人になりたまひぬ。え皇女の君おしたまはじ。また女人のあしき身を受け、長夜の闇にまどふは、ただかやうの罪によりなむ、さるいみじき報いをも受くるものなる。人の御怒り出でさなば、長き絆となりなむ。もはらうけひかず」と、頭ふりて、ただ言ひに言ひ放てば、

〔夕霧〕四—四一七

「若菜下」巻の例は、女楽で見事な箏の演奏を披露した紫の上と比べて、妻雲居雁の楽才を夕霧が思いめぐらすところである。たしかに亡き大宮から教習を受けていたもののそれは十分でなく、夕霧の前で雲居雁は何ら弾くこともなかったようだ。「子どもあつかひ」に忙しいこともあってか、「をかしきところも」なき雲居雁なのだという。そうはいっても、女であることをもって「腹あしくてもねたみうちしたる」と、嫉妬深い彼女の性情・態度も見られるのだとしている。だが、それもすぐさま反転して、その嫉妬する態度こ

そが「愛敬づきてうつくしき人さま」であると肯定的に捉えられる。雲居雁に対する人物論で「主婦」のすがたが読み取られたり、「家庭的」などと評されるのは、このような例を指しているのだろう。もつともな人物批評であるが、虚構の物語に限らずともひとりの人物を批評するということは、誰か別の者が理解した主観的な把握を受け売りしていることが少なくない。

この場面でも、「をかしきところもなくおぼゆ」と、「おぼゆ」で受けていたり、「ものしたまふめる」と、推定の「めり」が伴っていることは、誰かの目を通した受け止めに過ぎないことを語っている。あくまで、この雲居雁批評は夕霧の目線に沿ったものに過ぎないということだ。「をかしきところ」もなく「子どもあつかひ」する点や、「愛嬌づきてうつくしき人さま」に注目するのも分からなくはないが、そうした点ばかりを過大視して「主婦的」「家庭的」などと批評する前に、「腹あしくてもねたみ」をする雲居雁の性格、その一面はまず押さえておかななくてはならないだろう。

そのように強く妬むことも厭わない雲居雁の性情の源として、「夕霧」巻の用例に「本妻強くものしたまふ」と見えることはとても大事な点であろう。妻の立場からの怒り、妬みであるのだとここで語られることは見過ごすべきでない。大臣家の娘として育ち、また自身が大名家の妻として子どもらの人生を今後差配する点からは、彼女の置かれた位置と矜持とが知られる。「本妻」の語については、「も

との妻」、すなわち以前からの妻の意味とする見解が示されているが、だとすれば、「御怒り出できなば」と、本妻雲居雁の怒りを買えば成仏の妨げにもなるという点からは、後妻打ちにも通じる彼女の怒れる姿を認めることができるかもしれない。

・「らうたげにもなたまはせなす姫君かな。いと鬼しうはべるさがなものを」とて、
〔夕霧〕四一四七〇

・……鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにもの清げに若う盛りになほひを散らしたまへり、
〔同四七一〕

・「いづこととおはしつるぞ。まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、同じくはなりはてなむとて」とのたまふ。
〔同四七二〕

怒れる雲居雁のありかたについては、「鬼」に喩えられることも、その証左となろうか。夕霧は「いと鬼しうはべるさがなものを」と、雲居雁の悪口を言い、それを受けて「常に鬼とのたまへば」とする雲居雁の言葉からは、夕霧が自身を鬼呼ばわりすることが常体化していたことも分かる。また、「鬼神も罪ゆるしつべく」とあるのは光源氏の心内語ではあるが、夕霧の美しさをもってすれば色恋沙汰も「鬼神」が許すだろうとしており、雲居雁は「鬼神」にも見立てられてもいるわけである。ともあれ、こうした夫婦喧嘩のくだりについてはなおさら、家庭喜劇の一コマのように理解されるものなのだろう。なるほど、雲居雁が夕霧とやり合うにあたり、親密な関係

のもどで用いられる「まろ」という一人称を使う点などから、両者のやりとりは口喧嘩の次元にとどまるかもしれない。^(注22)しかし、「鬼」と喩えられることは、そのまま「うしろ」の世界から「這ひ寄」る彼女のすがたをしかと言いつたものと考えられるのではないか。

「さがなもの」「さがなし」の語については、人間の暗部にやどる禍々しさを語るものとして、かつて論じたことがある。^(注23)近江の君や、指喰いの女、弘徽殿太后、式部卿の大北の方、と一定の傾向をもつ人物に使われる。それを、近江の君のように「をこ者」として排除し、その禍々しさを矮小化したのと同様、雲居雁のそれも家庭喜劇の一コマとして、夕霧も、われわれ読者もまた、彼女の怒れるすがたを矮小化してきたのではなかつたらうか。

子だくさんの雲居雁。母としての側面や、母性といった語で捉えられることが多いようである。印象深い場面として、以下の例を挙げてみよう。

この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上も御殿油近く取り寄せさせたまで、耳はさみしてそそくりつくろひて、抱きてゐたまへり。いとよく肥えて、つぶつぶとをかしげなる胸をあけて乳などくくめたまふ。児も、いとうつくしうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御乳はいとかはらかなるを、心をやりて慰めたまふ。男君も寄りおはして、「いかなるぞ」などのたまふ。撤米し散らしなどして

乱りがはしきに、夢のあはれも紛れぬべし。

〔横笛〕四—三六〇

ここは、「つぶつぶとをかしげなる胸をあけて乳などくくめたまふ」とあって、雲居雁がわが子に自らの乳を含ませているところである。これまた「国宝源氏物語絵巻」の「横笛」に取り上げられており、乳を描くことの意味合いが問題となるところであった。^(注24)ただ、母としての側面や、母性の問題を持ち出す前に、本場面が霊の出現を語るところであることをあわせ考える必要があるのではないか。夕霧の夢に柏木の亡霊が現われ、その妖気の影響があつて雲居雁の子どもは泣き出したわけなのであり、頑是ない子どもを母があやすといった日常的な状況なのではない。そもそも「乳母」も傍にいたことが語られているわけだから、単なる授乳であれば雲居雁の乳が語られる必要はないわけである。

この場面でも「御殿油」が登場しているのは、魔除けの働きがあらうか。「散米」の呪術も見えていることから、「つだみなど」するわが子を魔物から必死に守らんとする雲居雁のすがたを語っている場面といえよう。そのように考えれば、「御乳はいとかはらかなる」(ここは異説もあるが、ひとまず乳の出ない乳を含ませる行為として読めば、この行為が妖気の支配する状況でなされることの意味を考えたい)となる。亀谷粧子は、その行為に子を守る呪術的意義を見ようとしており、賛同したい見解である。^(注25)

・母の乳汁を塗りしかば、麗しき丈夫と成りて、出で遊び行きき。
〔古事記〕上巻・大國主神、七九

・爰に男子、病を得て命終の時に臨みて、母に白して言はく、「母の乳を飲まば、我が命を延ぶべし」といふ。

〔日本靈異記〕中巻第二「烏の邪淫を見て世を厭ひ、善を修せし縁」一一三

言うまでもなく乳の力は生命を司るもので、右に示したように蘇生・復活にも大いに貢献する呪術的な力を宿すものと考えられてきた。^(注26)したがって、そうした信仰を基盤にすることから、新生児に乳を含ませる「乳付」という儀礼が発生したりもする。乳付については吉海直人が詳しく究明したところであるが、近代の民俗で見られるものにも、やはりまじないの意義があったようだ。^(注27)ともかくも、子を守らんとすること、それを母性と呼ぶならそれはそれで間違いない。しかし、近代的なものの方でもある母性なるものを持ち出す以前に、靈物と自ら格闘するその強さを有する雲居雁のすがたが認められるのではなかったろうか。

・また、まめまめしき筋を立てて、耳はさみがちに、美相なき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして、

〔帚木〕一一六三

・女御の君に、宮懸かり奉りて騒ぎ給ふを見れば、白き綾の御衣を奉りて、耳挟みをして、惑ひおはす。〔蔵開・上〕四七四

雲居雁の「乳をくくめ」る行為は、「耳はさみ」という所作ともになされたことにも目を向けておこう。^(注28)掲げた「帚木」巻の用例にたしかのように、それは「美相なき家刀自」を語るものであるのかもしれない。結果、「はしたない行為」として、「優雅な身だしなみを忘れ」た「主婦」なるものへと雲居雁が位置づけられてきたといえる。ただし、「耳はさみ」自体の用語例が少ないものの、『うつほ物語』「蔵開・上」巻の用例では、出産の介助時に「耳はさみ」が見られることは注目される。出産という物の怪が跋扈することも不思議でない緊迫した状況下なされるのが、「耳はさみ」であった。「はしたない」とひとくくりにするのでなく、激しく格闘するすがたとして雲居雁を見ておきたい。

怒れる雲居雁、その激しさが柏木の霊が出現する際にも立ち現れているのであった。母なり、主婦なり、そうした言葉を女性にあげがうことは、同時に慈愛に満ちた母性といった幻想を抱かせやすいものであろう。そのことで、見えなくなることがあるのではないか。こうした問題意識のもと、夕霧から手紙を奪う場面において「うしろ」から「這ひ寄る」彼女の姿に、靈的なものが立ち現れることとの繋がりを探りながら、物の怪に匹敵するがとき情念をもつ雲居雁のありかたを論じた。「鬼」と揶揄されることが実のところ彼女の荒ぶる本質を言い当てるものだったのである。そして、「耳はさみ」をして「乳をくくめ」という、一見すると母性の典型的な発現と

も見られる場面にこそ、自ら妖気と格闘する雲居雁の激しいすがたを認めることができたのである。

〔注〕

- (1) 『源氏物語』およびその他の引用は小学館新編日本古典文学全集により、私に傍線・頁数を付した。新編全集によらないものは各々明記した。
- (2) 『うつほ物語』「蔵開・中」巻では、女一の宮から届いた手紙を、仲忠の背後から朱雀帝がのぞき見ている例が見える(おうふう『うつほ物語』全)(改訂版)「蔵開・中」五四六)。
- (3) 鈴木日出男「源氏物語の人々」(雲居雁)(『新・源氏物語必携』学燈社、一九九七年)。
- (4) 高木和子「雲居雁」(『源氏物語事典』大和書房、二〇〇二年)。
- (5) 中西紀子「雲居雁―家族愛の発進―」(『源氏物語の姫君―遊ぶ少女期―』溪水社、二〇〇三年)。
- (6) 田坂憲二「夕霧巻の構造について―夕霧Ⅱ雲居雁の側面から―」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年)。
- (7) 安藤徹「雲居雁三態」(『源氏研究』二〇〇五年四月)、平林優子「雲居雁の変貌」(『源氏物語女性論 交錯する女たちの生き方』笠間書院、二〇〇九年)。
- (8) この問題については、玉上琢彌『源氏物語評釈』第八巻「夕霧」巻・鑑賞(角川書店、一九六七年)、福嶋昭治「雲居雁―立ち姿を見せた女―」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年)、稲本万里子「『源氏物語絵巻』の詞書と絵をめぐって―雲居雁 女三宮・紫上の表象―」(『交渉することば』叢書 想像する平安文学第四巻、一九九九年)、『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夕霧』「鑑賞欄」(至文堂、二〇〇二年、吉海直人執筆)等参照。
- (9) 「たつ」ことの古代的な意義については、保坂達雄「たつ」(『古代語誌―古代語を読むⅡ』桜楓社、一九八九年)、多田一臣「たつ」(『万葉語誌』筑摩選書、二〇一四年)等が参考になる。また、『源氏物語』では他に女三の宮が立つ例が見られるが、ここについては、太田敦子「女三の宮の立ち姿―柏木の死をめぐる表現機構―」(『源氏物語 姫君の世界』新典社、二〇一三年) 参照。
- (10) 中西紀子「国宝『源氏物語絵巻』における雲居雁像―夕霧巻画面の立姿から―」(『源氏物語の姫君―遊ぶ少女期―』溪水社、二〇〇三年)
- (11) 平野美佳「異類としての夕顔―「這ふ」という表現をめぐって―」(『物語文学論究』二〇一六年三月) は、夕顔の女君に多く「這ふ」の語が関連することを例に引きながら、夕顔に蛇のように絡みつく情念のすがたを見定める。
- (12) この問題については、竹内正彦「近江の君の賽の目―「若菜下」巻の住吉参詣における明石尼君―」(『源氏物語発生史論―明石一族物語の地平―』新典社、二〇〇七年) 参照。
- (13) 『讀岐典侍日記』の例については、「抱く」ことの意義を論じた、津島昭宏「戸にいる翁、抱く姫―『竹取物語』の親と子を考える―」(『横浜英和学院教育』二〇〇九年三月)、また、死にゆく者に添ひ臥すことは、津島昭宏「母に「添ひ臥す」落葉の宮―死と招魂の観点から―」(『日本文化研究』二〇一七年三月) 参照。
- (14) 林田孝和「源氏物語における死後の描写―ともし火をかかげつくして―」(『林田孝和著作集』第一巻、武蔵野書院、二〇二二年)、津島昭宏「欲待の火―光源氏と空蟬を繋ぐもの―」(『物語文学論究』二〇一六年三月)。
- (15) 三柴友太「身体伝承の研究―「路傍の怪」にみる足元・背後―」(『昔話伝説研究』二〇一二年四月)。なお、金菱清(ゼミナール)編『呼

び覚まされる靈性の震災学 311 生と死のはざままで』(新曜社、二〇一六年)で紹介される靈體驗の事例も参考になろう。

(16) 常光徹「後ろ向き」の想像力」『しくさの民俗学—呪術的世界と心性—』ミネルヴァ書房、二〇〇六年。

(17) 安井眞奈美「狙われた背中—妖怪・怪異譚からみた日本人の身体観」『怪異と身体民俗学—異界から出産と子育てを問い直す』せりか書房、二〇一四年。

(18) 背守りについては、「祈りの背守り」『季刊銀花』一九九九年二月、「背守り 子どもの魔よけ」(JIXI7、二〇一四年)、山本咲耶「背守りの習俗の三類」(滝川国文)二〇二三年三月)等参照。なお、筆者は二〇二二年九月三日(土)に、顧問を務める國學院大學栃木短期大学民俗学研究会の学生らとともに、石川県金沢の茶屋街にほど近い鬼子母神真成寺を訪ねた。ご住職を含めお寺の方々からご丁寧な説明を受けた。それは奉納された産育信仰資料の数々であり、百徳着物や背守りが施された産着がとりわけ注目されるものであった。前者は、百軒からもらい集めたハギレをパッチワークのように縫い合わせて仕立てた着物で、百の徳によって子どもの成長を祈念するもの。

(19) 竹内正彦「ぬき足の光源氏—王朝びとの足音をめぐって—」(むらさき)二〇二二年一月)は、「足音とは魂が顕ち来る音」であると論じる。

(20) 原岡文子「雲居雁の身体をめぐって—常夏の巻を始発に—」(源氏物語とその展開—交感・子ども・源氏絵)竹林舎、二〇一四年。

(21) 工藤重矩「平安時代の婚姻制度」(『平安朝の結婚制度と文学』風間書房、一九九四年)、青島麻子「平安朝の婚姻慣習—「妻」を表す用語から—」(『源氏物語 虚構の婚姻』武蔵野書院、二〇一五年)参照。

(22) 森野宗明「雲居雁の造型と言動描写—「まろ」(自称)を使う妻たち—

『王朝貴族社会の女性と言語』有精堂、一九七五年)。

(23) 津島昭宏「悪き」近江の君」(『中古文学』一九九七年五月)。

(24) 木村朗子「乳房はだれのものか—欲望をめぐって—」(『乳房はだれのものか 日本中世物語にみる性と権力』新曜社、二〇〇九年)、宇野瑞木「紫の上の乳くくめ考—仏教報恩思想との関わりから—」(『ひらかれる源氏物語』勉誠出版、二〇一七年)、水野僚子「中世の絵巻にみる乳房の表象—「源氏物語絵巻」における雲居雁の身体表象の意味と機能—」(『日本女子大学紀要 人間社会学部』二〇一七年)等参照。

(25) 亀谷粧子「御乳をくくめ」る紫の上—「薄雲」巻における明石の姫君の処遇をめぐって—」(『国学院大学大学院文学研究科論集』二〇二二年三月)。

(26) 松村武雄『日本神話の研究』(第四卷、培風館、一九五八年)、石上堅「血 乳」(『日本民俗語大辞典』桜楓社、一九八三年)、犬飼公之「ちとタマの発想」(『埋もれた神話—古代日本の人間創成—』おうふう、一九九五年)等参照。

(27) 吉海直人「乳付考」(『源氏物語の乳母達—「源氏物語」への階梯—』世界思想社、一九九五年)。近代に見られる例については、倉石あつ子「乳つけ」(『日本民俗大辞典』下巻、吉川弘文館、二〇〇〇年)に簡潔に説明されている。

(28) 「耳はさみ」の問題については、安藤徹「源氏物語の耳伝—女の耳—」(『国文学論叢』二〇〇三年三月)、高野奈未「源氏物語」と『伊勢物語』二三段—雲居雁をめぐって—」(『源氏物語を開く』武蔵野書院、二〇二一年)、植木朝子「猿楽の世界の魅力 夕霧の恋の喜劇性」(『源氏物語を開く』武蔵野書院、二〇二一年)参照。

〔付記〕本稿は二〇二二年度中古文学会秋季大会(於・山口大学)で口頭発表したものを礎としている。